

# 開眼

2014 9

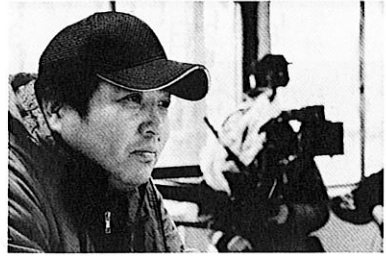
No. 706

昭和32年12月15日 第3種郵便物認可  
平成26年9月1日発行 第62巻第9号通巻706号  
毎月1回1日発行



## 巻 頭 言

尚半 なおなかばなり



映画監督 錦 織 良 成

私の母が、河瀬法子先生の教室で書道を習っているご縁で、この巻頭文を書かせていただくことになりました。大変光栄なことです。また、島根に住んでいない「長男」にとつて母が手習いを通し皆様と親しくさせていただき、生きがいを感じていることに、大変喜んでおります。

さて、文字を書く、ということでは私が真っ先に思い出すのが名優「緒形拳」さん。緒形さんには、私が企画し脚本と監督をつとめました映画「ミラクルバナナ」に出演していただきました。物語は、電気、水道のインフラもままならず、ノートも満足に買えない家庭も多い中米ハイチにて、バナナの幹の繊維から和紙をすくことが出来ることを知った大使館員の女の子が美濃の和紙職人を連れハイチに渡り、子供たちと一緒にバナナの木から紙をすき、子供たちが自分たちで作った紙に文字を書く、という物語。十二年前、書店で見つけた絵本「ミラクルバナナ」をもとに取材し、バナナの木から紙を作れば世界の紙の三分の一がまかなえること、バナナは芭蕉科の一種で大変良質な紙が出来ること、などをモチーフに作った映画です。緒形さんは、

和紙職人を演じるために、美濃に向き何日も修業し役作りをして挑んでくれました。

この和紙職人の役は緒形さんしかいない、と思った私は、当初何度も所属事務所にアプローチしましたが、なかなかお会いすることが出来ません。そこで作品をみてもらおうと映画「白い船」のDVDを送りました。すると事務所から会いたい、との連絡を頂きお会いすることに。ホテルの一角で緒形さんは待つていました。白い船をご覧になった感想は「手練れの監督かと思った」でした、四十歳そこそこの若い監督が作ったとは思われなかったようです。白い船をみてどんな監督か一度会ってみたくなっただけで映画への出演を承諾したわけではない、と冒頭言われたのを今でも覚えています。映画の事、これからの事、など二時間たっぷり話をして「縁があるといいね」の言葉を残し帰って行った緒形さん。その圧倒的な存在感、本物が持つオーラを目の当たりにし、時間を忘れてしまいました。翌日、我が家のFAXに緒形さんのスケジュール表の全てが送られてきました。出演OKのサインでした。本物は案外、さりげ

なく目立たず佇んでいるもの：緒形さんとそんな話しをしたことがあります。本物はいかにもそれらしく振る舞ったりする必要はないし、わかる者にはわかるから余計な説明も要らない、という話でした。

美濃の和紙すき職人さんを緒形さんと一緒に訪ねた際、その技術に目を奪われ身なりなど全く気にしないその翁は初めて会ったとは思えないほど気さくで笑顔の似合う自然体の人でした。自信があるからなのでしょう。本物はみんなが思っている常識とは違い案外「らしくない」のかもしれない、という結論に至りました。知られていようがまいが本物は本物、それを見抜く力が必要である、と緒形さん。

生前、毛筆にて小ささまざまな紙に書を書いていましたがロケ中に自ら書いたバナナの紙に「尚半」と書いてくれました。「なおなかばなり」緒形さんをもつてしても俳優業は未だ道半ば、とのメッセージでした。私自身本物に拘り、映画を撮り続けていかなくは、と緒形さんの書を見るたびに思います。